

「夏小紅」「ていらら」

県がマンゴー新品种

県農林水産部は12日、新たな県産マンゴー「夏小紅」と「ていらら」を発表した。それぞれ米国から導入し、国内で初めて育成した新品种で、今年6月に商標登録した。県は今後、両品種の生産に力を入れ、県産マンゴーのブランド力向上につなげる。今期生産量は「夏小紅」が1680㍑、「ていらら」が440㍑を見込む。



米国から導入した品種を育成し、新たに商標登録した県産マンゴー「夏小紅」(左)と「ていらら」

国内初育成、ブランド強化

「夏小紅」は丸い果実で甘みが強く、「ていらら」は細長くて甘酸っぱい食味が特徴。収穫期は7月下旬から

9月上旬で、従来、県内で栽培されているアーウィン種の収穫が終わる時期とキーツ種の収穫が始まる時期の間に当たる。県は県産マンゴーの収穫期拡大や総生産量の増加を期待している。新たに導入した品種名は「夏小紅」が「リベンス」、「ていらら」が「パレンシアプライド」。

県農水部は2003年に米農務省からマンゴー18品種を導入し挿し木で育成。その中から沖縄の環境に適した2品種を選抜し、07年ごろから今帰仁村や宮古島市などで試験的に栽培してきた。今年、富裕層やリピーターなどをターゲットに

本格的な販売を始める。5年後の生産量は「夏小紅」100㍑、「ていらら」71㍑を計画。知念武農水部長は「県産ブランドとして差別化を図りたい。農家の所得向上にもつなげる。今後のマンゴー産地づくりに期待したい」とPRした。

(2012年7月13日 4面)

☆夏小紅、ていらら、それぞれの特徴を挙げてみよう。

☆2品種のマンゴーはどのようにして生み出されたのでしょうか？

年 組 名前